TUFS news

X Facebook Instagram YouTube

01

日台の学術交流が結ぶ、知の架け橋

「浅井・小川台湾原住民資料」を台湾の国家図書館へ寄贈



（左から）三尾裕子名誉教授（「浅井・小川台湾原住民資料」共同研究プロジェクト代表）、（2人目）近藤信彰AA研所長、（5人目）台湾原住民語研究の第一人者である李壬癸台湾中央研究院博士

2026年6月19日、アジア・アフリカ言語文化研究所（AA研）にて、台湾の先住民族言語に関する歴史的資料「浅井・小川台湾原住民資料」の国家図書館（台湾、略称NCL）への贈呈記念式典とシンポジウムが開催されました。

寄贈されたのは、小川尚義、浅井恵倫、土田滋ら日本人研究者が1930年代から40年代に収集した、台湾諸語に関する一次資料群です。フィールドノート約400点、単語カード2万2,000枚以上、写真や音声レコード1万4,000点以上を内包し、絶滅言語の記録など言語学・民族学において極めて高い学術的価値を有しています。

AA研では2000年度より、元所長の三尾裕子名誉教授（現・慶應義塾大学教授）を代表とする共同研究プロジェクトを立ち上げ、四半世紀近くにわたり分類・整理、および電子化作業を継続してきました。



寄贈する資料の例。台湾原住民族語の単語比較（フィールドノート）

日本と台湾の長年の学術交流を経て実現した今回の寄贈は、貴重な資料が台湾へと帰還し、それを活用した次世代の研究を発展させていくための新たな一歩となります。

02

長年の歩みが結んだ友好の証

ラオス政府が本学を表彰 鈴木玲子教授に「友好勲章」

2026年3月24日、駐日ラオス大使館にて、ラオス政府から本学の日本ラオス両国における友好関係と協力の深化に対する貢献を称え、東京外国語大学に表彰状が授与されました。

また、長年にわたるラオス言語文化の教育と両国間の友好の深化に対する貢献と功績を称え、鈴木玲子教授（大学院総合国際学研究院）に「友好勲章」が叙勲されました。

今回の受章は、本学が地道に積み重ねてきた教育・研究および国際交流の成果が公に評価されたものです。本学は、長年にわたり培われた連携と信頼関係を礎に、今後も東南アジア地域をはじめとする国際社会との友好関係および教育・研究活動の発展に寄与してまいります。



受章の様子（左：鈴木教授、右：アンバイ特命全権大使）

03

「もっと練習に打ち込みたい！」

サークル棟の空調設備の設置が完了

近年続く猛暑対策と学生の安全な課外活動環境の確保を目指し、本学基金を活用して進めてきた「サークル棟空調整備プロジェクト」が2026年8月末に完了いたしました。夏場の熱中症リスクや満足度調査での要望を受け、春名学長と代表学生の座談会を経て最優先課題として整備を推進しました。寄附者の皆さまからの温かいご支援により、年間を通じて安全・快適に活動へ打ち込める環境が整いました。ご協力を賜りました皆さまに心より御礼申し上げます。



天井に設置された空調設備

社会や文化をひもとく“知的エンタメ”ポッドキャスト

ママタルトの地球ディッシュカバリー ～東京外大の先生と一緒～



本学では、TBSポッドキャストとのコラボによる音声番組「ママタルトの地球ディッシュカバリー ～東京外大の先生と一緒～」を配信しています。お笑いコンビ・ママタルトさんをパーソナリティに迎え、本学の教員とともに、世界の食文化を入り口に各地の社会や文化をひもとく“知的エンタメ”として、笑いと学びをわかりやすくお届けします。番組は毎週火曜日に新エピソードを公開しており、パキスタン、シリア、エチオピア、タイなど、これまでに旅した様々な国や地域の食や文化、ゲスト教員の専門分野について、前編・後編の2回にわけてじっくり深掘りします。いつでもお聴きいただける音声番組として、世界の多様な言語や地域、文化を学ぶきっかけを提供しています。

これまでに旅した地域（2026年9月現在）



1. 南アジア・パキスタン／2. 中東・シリア／3. アフリカ・エチオピア／4. チベット語圏／5. ラテンアメリカ・キューバ／6. 東南アジア・タイ／7. アフリカ・カメルーン　日本／8. ヨーロッパ・ボーランド／9. オセアニア・パプアニューギニア／10. 東アジア・モンゴル語圏／11. 東南アジア・マレーシア／12. 極東ロシア／13. ブラジル／14. バスク地方／15. エジプト／16. 北インド／17. ウズベキスタン／18. フィリピン

視聴方法

無料アプリ（Spotify、Apple Podcast、YouTubeなど）で「地球ディッシュカバリー」や「東京外大」と検索して番組をお楽しみいただけます。

Spotify　Apple Podcast　Amazon Music　YouTube

お問合せ【月～金 9:00-17:00、祝日・一斉休業除く】
東京外国語大学 広報・社会連携課 広報係
TEL：042-330-5150　Email：koho@tufs.ac.jp

同窓生情報データベースシステムへの登録のお願い

東京外国語大学では、卒業生の皆さまとのつながりを大切にし、同窓生ネットワークの充実を図っております。その取り組みの一環として、同窓生情報データベースシステムへのご登録をお願いしております。

ご登録いただくことで、大学からの最新情報やイベントのご案内、同窓生向け企画などの情報をお受け取りいただけます。また、世代や分野を超えた新たな交流のきっかけにもご活用いただけます。

既にご登録済みの方も、ご連絡先や勤務先等に変更がございましたら、最新情報への更新をお願いいたします。皆さまのご協力が、卒業生同士、そして大学とのつながりをより豊かなものにしていきます。

同窓生情報データベース 登録ウェブページ
https://www.tufs.ac.jp/alumni/alumnidb.html

お問合せ【月～金 9:30-16:00、祝日・一斉休業除く】
東京外国語大学 アラムナイ室
Email：tufs-alumni@tufs.ac.jp

東京外国語大学出版会 新刊のご案内



『生を見つめる翻訳 ── 世界の深部をひらいた150年』

久野量一　千葉敏之　真島一郎〔編〕

A5変型判・上製・464頁　定価：4,500円＋税
ISBN978-4-910635-22-4　C0098

海外の優れた著作を日本語に引き受ける営み――翻訳は、この150年余りの間、私たちの公共圏にはたして何をもたらしたのだろうか。当代第一線の翻訳家・研究者総勢37名が坦懐に明かす、翻訳をめぐる体験と考察。

アンケート

卒業生・学生の皆さま、あなたの「ラテンアメリカ」教えてください

留学・仕事・旅の記憶、友人や大切な言葉との出会い――。卒業生・学生の皆さまの「ラテンアメリカ」に関するエピソードを募集しています。寄せられた声は、Webサイト「TUFS Today」（本誌紹介ページ）でご紹介予定です。【締切：2027年1月末】

投稿フォームへ

東京外国語大学
Tokyo University of Foreign Studies

編集：東京外国語大学 広報マネジメント・オフィス
窓口：広報・社会連携課
〒183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1
TEL：042-330-5150

編集協力：株式会社文化工房
デザイン：clip

© 東京外国語大学
本誌記事、写真、イラストなどの無断転載を禁じます。

編集後記

東京外国語大学出版会から刊行された『生を見つめる翻訳 ── 世界の深部をひらいた150年』を手にとった際、言葉や文化の境界を越えて紡がれてきた歴史の中に、本学の確かな存在感が息づいていることを改めて実感しました。その代表的な足跡の一つが、日本とラテンアメリカの交流です。1897年のスペイン語科開設や笠戸丸での通訳をはじめ、本学は130年にわたり太平洋を隔てたこの地域と深い対話を重ねてきました。今号の巻頭特集「境界を越えるラテンアメリカ」では、5人の研究者による多様な切り口や、境界を越えて活躍する学生・卒業生のリアルな声をお届けしました。地球の反対側にある豊かな文化や社会の「いま」に触れ、日本との新たなつながりを感じていただくきっかけとなれば幸いです。（編集子）

tufspr2026102701

Globe Voice
グローブヴォイス
2026年10月発行
発行＝
東京外国語大学
広報マネジメント・オフィス
〒183-8534
東京都府中市朝日町3-11-1

言語や文化の違いを超えて、世界とつながる東京外国語大学の営みを、多様な「声」とともに届けていきたい ――。そんな思いを込めて『Globe Voice』No.14をお届けします。学生、教職員、卒業生らのまなざしから見えてくる、今を生きる感性や価値観に出会っていただけたら幸いです。

Globe Voice
Tokyo University of Foreign Studies Magazine
東京外国語大学

2026, Number 14

特集
境界を越えるラテンアメリカ …… 01

連載コラム
聴く …… 06
五感でふれる …… 07
歴史を刻む在学生 …… 06
TUFS news …… 08

特集 境界を越える

ラテンアメリカ

Crossing Paths in Latin America

言語、社会、人びとが交わる場所へ





明治～大正期の卒業生、豊島昌さんの絵葉書。1907年にリオデジャネイロから送られた。

太平洋を越えて行き交う、遠くて近い日本との関係

ぐるん！と地球の向こう側。太平洋を遥かに隔てながら、遠くて近いのが、日本とラテンアメリカの間柄です。

難破したメキシコ船を千葉沖で助けたのは、1609年のこと。数年後には、慶長遣欧使節がメキシコへ渡りました。明治期に入ると各国との国交が広がり、メキシコ、ペルー、ボリビア、ブラジル、アルゼンチン、キューバなど中南米諸国への移住が始まりました。

本学とラテンアメリカとの交流も、明治期に始まりました。1897年にスペイン語学科が設けられ、その後の1908年に初めてブラジルへの集団移住が開始された際の「笠戸丸」では、卒業生や学生ら5人が通訳や移民業務を務めました。その経験などをもとに、1916年にはポルトガル語学科も設けられました。

第二次世界大戦に翻弄されながらも、各地に根づいた日系人社会は現地で信頼を築き、ラテンアメリカ諸国による戦後日本の国際社会復帰への支援を後押ししました。1956年の日本の国際連合加盟に際しても、多くの国が支持を表明。その後も、人や文化、経済を通じた交流が重ねられ、両地域の結びつきは今日まで受け継がれています。

もっとラテンアメリカを知って、次の新しいフェイズへ

現在、約6億7千万人が暮らすラテンアメリカは、豊かな天然資源に恵まれ、多様な産業を擁する活力あふれる地域です。音楽や美術、文学をはじめ、多彩な文化・芸術も人々を魅了しています。他方では、貧困、格差、治安、環境などの深刻な課題も抱えています。

ラテンアメリカには、300万人以上と推計される日系人が暮らしており、その一部は日本のバブル経済とラテンアメリカの経済危機を背景に来日し、私たちにとって身近な存在となっています。また、ラテンアメリカは、日本にとって、資源・エネルギーや食糧などにおいて多くを依存する、不可欠の供給パートナーでもあるのです。

世界情勢が大きく揺れ動くなか、親日的な国の多いラテンアメリカとの関係は、ますます重要になっています。今あらためて、より深くラテンアメリカを知ることが、これからの私たち日本との関係を考える第一歩になるのではないでしょうか。

特集
境界を越える
ラテンアメリカ

Crossing Paths in
Latin America

5人の視点からみるラテンアメリカ

Five Perspectives on Latin America

言語、文学、食文化、社会、経済――多彩な視点からみる現在地

東京外国語大学でラテンアメリカを専門とする5名の先生方に、ご自身の研究をはじめとするさまざまな切り口から、ラテンアメリカの魅力や抱える課題などについて伺いました。日本から遠いようでいて意外に近い面もあるラテンアメリカの国々を理解するためのヒントになるかもしれません。



自分で見つけたブラジル



日本文化が息づく、サンパウロの東洋人街の七夕祭り（近田亮平撮影）

私が大学生でまだインターネットもなかった時代、日本人にとってブラジルはサンバ、サッカー、アマゾンなどのステレオタイプなイメージがほとんどでした。でも実際に訪れたサンパウロは大都会だったし、サンバは全く流れていない代わりに、米国のカントリーミュージックと日本の演歌を合わせたような、男性デュオの音楽が大人気。現実はこうなんだと知ったのです。現地で日系社会にお世話になったことから日本移民の歴史に関心を持ち、卒論のテーマにしました。多くの国から移民などを受け入れた多人種多民族の国ブラジルで、私が出会ったのは日本にはない多様性でした。またブラジルは、ラテンアメリカの中でも民主主義、自由、人権など、日本と共通する価値観が浸透した国です。距離は遠いけれども意外に近い国、と言えるのではないでしょうか。



ブラジル人はお祭りの天才。盛り上げることが本当に上手です。最近の一大イベントはサンパウロの世界最大のLGBTのパレード。社会的課題さえもお祭りとして楽しんでしまう、それがブラジルです。

大学院総合国際学研究院
近田 亮平 教授 KONTA Ryohei
研究キーワード：社会問題／社会政策／社会学／ラテンアメリカ／ブラジル

世界の食文化を変えた食材たち



鮮やかな赤色と爽やかな酸味が特徴のローゼル

いわゆるコロンブス交換で、ラテンアメリカの食材がヨーロッパにもたらされなければ、世界の料理は全く違うものになっていたでしょう。イタリア料理のトマト、ドイツ料理のジャガイモ……トウガラシやパイナップル、トウモロコシもラテンアメリカ原産です。逆に、外から入ってきて今では世界的な産地へと成長したものに、コーヒーや大豆などがあります。

広大なラテンアメリカには国や地方によって独自の食文化が生まれました。移民がもたらした食文化も、現地の環境に合わせて姿を変えています。日系移民は、日本の食材が手に入らないなかでさまざまな工夫をしました。たとえばブラジルの日系社会では、ローゼルというハイビスカスの仲間の萼を塩漬けにした「花梅」が梅干しの代替として食べられてきました。私も食べたことがありますが、故郷の味を再現しようとした移民たちの工夫には感動します。そうした人々の努力もあって、現在ではサンパウロあたりなら、海苔やごぼう、豆腐、干し椎茸、ワカメまで、たいていの日本食材は手に入るようになりました。



ブラジルのブッフェでは、料理をきれいに分けて盛るというより、ご飯や豆、肉、サラダなどを一枚の皿にどんどん盛っていく人をよく見かけます。デザートでも、ケーキと果物を一緒に楽しんだり。いろいろなものを一つの皿で楽しむところが、なんともブラジルらしいな、と感じます。

大学院総合国際学研究院
武田 千香 教授 TAKEDA Chika
研究キーワード：ブラジル文学・文化／アフロブラジル文学／翻訳



ブラジリア大聖堂前を行進する住宅問題などの改善に取り組む社会運動の参加者たち（UMM提供）

ラテンアメリカ文学は、なぜ読みづらいか



ガルシア=マルケスの故郷アラカタカの鉄道駅

ラテンアメリカ文学と聞くと、ガルシア=マルケスの『百年の孤独』を思い浮かべる人は多いでしょう。同作でラテンアメリカ文学に目覚めたという人が多数いる一方、読み通せず挫折する人も少なくありません。それはなぜでしょうか。私たちは西洋的な枠組みに基づいた「小説」のイメージを勝手に作ってしまっているからです。ラテンアメリカ文学には歴史、国際関係、政治などさまざまな要素が含まれていて、私たちの考える「小説」の範疇には収まりません。さらに、漫画や映画のような要素も入っています。日本のように細分化された商品は作れないラテンアメリカでは、一つのものですべてを味わいたい気持ちが強いのです。細分化されない分、一つの作品はとても豊かなものになります。つまり、ラテンアメリカ文学は「総合芸術」「総合娯楽」として読むのがふさわしいのです。



文学、経済学、国際関係学などといった既存の分け方は、ラテンアメリカを学ぶ上ではあまり意味がありません。旧植民地地域の文化は、西洋的な枠組みではないものからできています。それを捉えるまなざしが必要。

大学院総合国際学研究院
久野 量一 教授 KUNO Ryoichi
研究キーワード：ラテンアメリカ文学／キューバ文学／翻訳



1997年よりサンパウロで続くLGBT+プライドパレード（近田亮平撮影）

日系人の歩みに寄り添い、育む多文化共生



「日本のブラジル」と呼ばれる群馬県大泉町

ラテンアメリカの日本人コミュニティで「日本人」としての思いを育み、日本の伝統と文化を守ってきた日系人の方々。1990年以降の来日では、言語や習慣の違いから「外国人」と扱われ、深刻なアイデンティティの葛藤に直面しました。来日時の年齢に応じた学年に一律に編入されることで、日本語が理解できず授業から取り残される課題も深刻です。こうした課題を個人の努力不足に帰するのではなく、学習言語や生活適応を総合的に支える教育支援が不可欠です。

複数の文化や言語の中で育つことは、他者と共に生きる選択肢を増やし、豊かな心を育む素敵な強みとなります。滞在先の文化やルールの背景を丁寧に伝え合うとともに、相手が歩んできた歴史や暮らしに優しく思いを寄せること。ラテンアメリカの豊かな社会や文化への学びを深め、互いを尊重し合い日々の小さな対話を重ねていく姿勢こそが、誰もが自分らしく笑顔で暮らせる、寛容な多文化共生社会へとつながっていきます。



カフネ（Cafuné：頭を優しく撫でたりする愛情表現）、ジンガ（Ginga：サッカー用語で知られる言葉で、元はふらふら歩く〈という意味〉）など、日本語でも知られるようになったポルトガル語も増えていますよ！

世界言語社会教育センター
ピシテリ エリゼウ 特任教授 Eliseu PICHITELLI
研究キーワード：
Education, Language, Human Development, History of Immigration

極端な格差社会、経済の二重構造



ブラジル最大の都市サンパウロの社会格差の象徴、パライゾポリス（ファヴェーラ）と高級マンション

ラテンアメリカには33の独立国がありますが、経済発展という面で、はっきり先進国と言える国はまだありません。ラテンアメリカ経済のミステリーは、ポテンシャルはあるのに生かしきれず持続的な経済成長につなげられないところ。右の【図1】を見ると、1960年には日本を含む東アジアは圧倒的に貧しい一方、ラテンアメリカは欧米に次ぐ豊かさを享受していました。ところが、その後の50年間の経済成長の違いにより、2010年代には遂にアジアと立場が逆転しました。貧困層がまだどの国にもいますし、ラテンアメリカは世界で最も不平等な地域です。【図2】と【図3】は、45度線（完全平等）から右下に離れるほど、その地域や国の所得格差が大きいことを示します。公教育の改善がなかなか進まない上、経済はフォーマル部門と、労働法や社会保障が適用されないインフォーマル部門の二重構造を呈しています。これがラテンアメリカ経済を理解するための一つの鍵です。

一方で困難の連続があっても、工夫を重ねながら逞しく今を生きる、それがラテンアメリカの人々なのです。



スペイン語専攻で初めて学んだラテンアメリカ。植民地支配や先住民のことなど、すべてが未知の世界でした。メキシコに留学した際ストリートチルドレンに衝撃を受け、経済の仕組みを知りたいと思うようになりました。

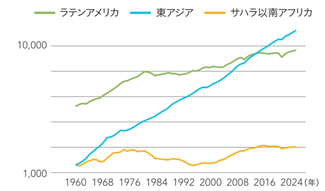
大学院総合国際学研究院
内山 直子 准教授 UCHIYAMA Naoko
研究キーワード：ラテンアメリカ研究／国際経済学／開発経済学



色鮮やかな衣装で練り歩く、ブラジルの沖縄系フェスタ（近田亮平撮影）

ラテンアメリカの経済成長

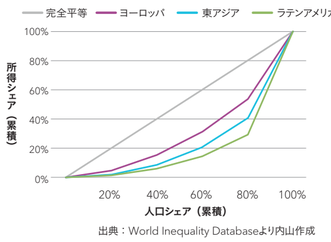
【図1】発展途上地域の経済成長
（一人当たりGDP）［2015年USドル基準］



出典：World Development Indicatorsより内山作成

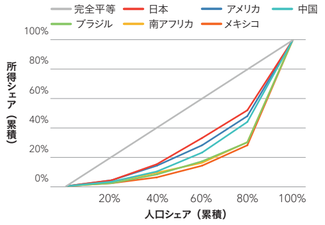
ラテンアメリカは世界でも所得格差が大きい地域

【図2】世界の所得格差（ローレンツ曲線）［2023年］



出典：World Inequality Databaseより内山作成

【図3】各国の所得格差（ローレンツ曲線）［2023年］



出典：World Inequality Databaseより内山作成

あつまれラテン音楽好き! / TUFSの公認団体

アルゼンチンタンゴサークル

アルゼンチンタンゴは競技ダンスのタンゴとは別で、即興性と自由度が高い「対話」のような踊り。ヨーロッパでは広い世代に人気です。日本の大学でサークルがあるのは東京外語大だけ。踊れば人との距離が縮まりますよ!



菅原 啓太さん
言語文化学部
スペイン語専攻 3年

東田 紗季さん
言語文化学部
スペイン語専攻 4年

ブラジル研究会



添田 桔平さん
国際社会学部
南アジア地域専攻 3年

ブラジル音楽にはサンバ、ボサノヴァ、セルタネージョ、ボイプンバ……など多くのジャンルがあり、使う楽器も違います。共通する魅力は、誰でもできて、みんなで熱狂できること。ブラ研のHPでその魅力に触れてください!

公式サイト
https://tufsbrasil.com/

サルサ研究会

キューバ音楽とアメリカやプエルトリコの音楽がミックスされてできたのがサルサ。哀しい歌詞を歌っても底抜けに明るくて、観客とのコールアンドレスポンスも盛り上がります。ラテン音楽初心者も気軽に始められますよ!



熊谷 連斗さん
国際社会学部
中東地域専攻 2年



大学院総合国際学研究科
博士後期課程 3年
小島 クリッシイ りかさん
KOJIMA Chrissy Lika

「日系人」について知ることは自分の人生を掘り下げること

私の両親は日系ブラジル人です。私は両親が出稼ぎに来ていた時に日本で生まれ、5歳でブラジルに戻って、10歳の時に母・祖父母とともに再び来日しました。その時は日本語がまったく話せない状態で、勉強に追いつくのはとても大変でした。働き手は母一人なので楽ではない生活でしたが、先生に背中を押されて大学に進学。一度就職して資金を貯めて大学院に入りました。家の事情でいろいろな諦めを強いられた自分の人生を振り返って、それはなぜだろう、日系人って何だろう、という疑問が湧いてきて、その答えを探すために大学院で学びたかったのです。研究テーマは日系人のアイデンティティとその歴史、記憶についてです。

2年前に久しぶりにブラジルに渡り、訪れた各地の日系コミュニティで、たくさんの愛をもらいました。ブラジルは愛であふれている国だなと思います。どこのコミュニティも、両手を広げて温かく迎えてくれて、ご飯と寝るところを与えてくれました。

これから、今までの研究を博士論文にまとめつつ、移民の歴史に在日ブラジル人の歴史も組み入れて、それを日本の社会に見せていけたらなと思っています。まずは私ができることから少しずつやっていくつもりです。



ブラジルに暮らす祖父母の家



日系コミュニティの象徴のひとつである鳥居(サンパウロ州グァタパラ移住地)

特集
境界を越える
ラテンアメリカ
Crossing Paths in Latin America

境界を越える人びと
People Who Cross Borders

遠く離れたラテンアメリカも、一歩踏み込めばぐっと近くなる。学び、働き、暮らし、人と出会うことで見えてきたものとは? 境界を越えてこの地域とつながる在学生・卒業生に聞きました。



パパイヤの木

1+1=2ではない世界がメキシコにはあります

メキシコ留学中に知り合った女性と日本で結婚し、その後メキシコへ移住。現在は企業関係や公的書類などの翻訳を主な仕事にしています。メキシコの魅力は、「1+1=2ではない世界」があること。何でもAIがこなす時代だからこそ、数字や効率だけでは割り切れない、人間らしい豊かさに価値を感じます。みんなSNSも大好きですが、何かあればワイワイ集まってお酒を飲み、週末には家族で食卓を囲む。そんな人と人とのつながりが息づく暮らしが、私には心地いいのです。一方、メキシコ人の日本への関心は非常に高く、日本文化や観光について貪欲に情報を集めています。日本からももっと積極的に情報を発信すれば、両国の距離はさらに縮まっていくはずです。

外語会メキシコ支部長/
メキシコ・アグアスカリエンテス州在住
1999年 外国語学部 スペイン語学科 卒業
川村 宣人さん KAWAMURA Yoshihito



東京外語会メキシコ支部のメンバーは対話アプリで連絡をとり合っています。留学中に困り事があったら相談を!



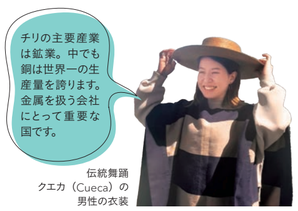
©shutterstock.com

アグアスカリエンテス市内中心部にある大きなオブジェ

日本人が考える以上にチリ人は日本に関心がある?

最近まで3年間チリに駐在し、現地スタッフの労務管理など、人事・総務の業務に携わっていました。チリはラテンアメリカの中でも近代化が進んでいますが、若者も政治について熱心に語るなど、まだ「若い国」という印象があります。一方、驚いたのは、日本文化への親和性の高さです。日本のアニメは以前からテレビで放映され、幅広い世代に親しまれてきました。日本食レストランも増え、日系企業で働きたいという人も少なくありません。日本から見ると、チリは物理的にも心理的にも遠く感じられる国ですが、現地に暮らすと、私たちが思う以上に日本を身近に感じてくれていることに気づきます。これから日本とチリの関係が深まる可能性は、十分にあると期待しています。

JX金属株式会社
2020年 言語文化学部 スペイン語専攻 卒業
夏原 実佑さん NATSUHARA Miyu



チリの主要産業は鉱業。中でも銅は世界一の生産量を誇ります。金属を扱う会社にとって重要な国です。

伝統舞踊クエカ(Cueca)の男性の衣装



JXチリ拠点で約30年間勤務する女性(中央)が60歳のお誕生日(還暦)のときに事務所のみんなでお祝いしている様子

地元に密着したアルゼンチンのコミュニティ演劇

中学から演劇部に所属し、今も観劇を続けています。演劇には、舞台上の出来事を追体験することで、知らなかったことに気づき、視野を広げる力があると感じています。卒業論文では演劇と多文化共生について研究するため、留学先のアルゼンチンでも演劇を鑑賞しました。最も印象に残ったのは、場面が変わるたびに観客が部屋を移動する『La Fantasma』。演出や舞台美術にも工夫が凝らされ、内容が十分に理解できなくても楽しめました。

現地では、プロの俳優ではなく地域の人々が、地元の歴史や出来事を題材にする「コミュニティ演劇」が盛んで、50以上の団体が活動しています。日本にも、地域の人々が演劇を通じて互いを知る活動があり、こうした取り組みがさらに広がってほしいと思います。

言語文化学部
スペイン語専攻 4年
岩崎 七海さん IWASAKI Nanami



La Fantasmaの公演



ラプラタのコミュニティ演劇のパンフレット

コミュニティ演劇はカルチャーセンターなどで上演。演出や舞台美術もユニークなものがあります



留学中に所属していた演劇クラブの記念写真
(後列左が岩崎さん)

映画から見えるラテンアメリカの素顔

ラテンアメリカ映画は、現地の社会や人々の暮らしと密接につながっています。決して楽ではない現実の中で、なぜ映画をつくり、見るのか。映画人たちはそんな根本的な問いを常に抱えているように感じます。だからこそ作品には、いまある現実を映しながら、そこを超えて未知の世界へ進もうとする意思が感じられます。映画を介して、ニュースだけでは見えてこない人々の想像力や感情に触れられることも大きな魅力です。近年注目しているのは、チリやアルゼンチンなどで非商業的な形で映画を制作・配給する活動。独自のネットワークを築きながら、国境や言語を越えて作品を届けています。魅力的な映画には、既存の枠組みを超えて人を惹きつけ、つなぐ力があるのです。

ラテンアメリカ映画研究者/名古屋外国語大学助教
2026年大学院博士後期課程
単位取得満期退学
新谷 和輝さん NIIYA Kazuki



動かすと絵が動いて見える巨大ソーマトロープ

おすすめは、全編アイマラ語で撮影されたペルー映画『アンデス、ふたりぼっち』。アンデスで暮らす老夫婦を描き、長年見過ごされてきた人々の世界を鮮烈に伝える作品です。



研究している、チリの映画教育のアーカイブにて

危険を知るからこそ生まれた助け合い守り合う温かさ

大学の寮で出会った留学生の中で、特に人柄の温かさを感じたのがコロンビア人の友人でした。実際に留学すると、現地の友人が危険な場所を教えてくれたり、積極的に一緒に行動してくれたりすることが新鮮でした。治安の問題や内戦を経験してきたからこそ、密にコミュニケーションを取り、互いに助け合う精神が育まれたのかもしれません。コロンビアは生物多様性に富み、コーヒーやカカオなど質の高い農作物にも恵まれています。留学を通して、こうした豊かさを生かすことも国の成長につながると考えるようになりました。卒業後は、現地法人を持つ種苗会社に勤務する予定です。花卉栽培・輸出も盛んなコロンビアで、農作物の価値を高め、その魅力を世界へ届ける仕事に携わりたいです。

国際社会学部
ラテンアメリカ地域専攻 4年
礒根 知可さん ISONE Chika



その場の状況を楽しみ、柔軟に行動する人々に影響を受けて、「とりあえずやってみる精神」が身につきました。

コロンビアの伝統的な防寒着ルアナ(Ruana)



コーヒー豆の収穫

日本とラテンアメリカをともに経済成長できる関係に

大学受験で世界史を学んだ際、インカやマヤなどの古代文明に興味を持ったことが、ラテンアメリカとの出会いでした。大学2年次には短期留学でメキシコへ。再び長期留学を考えていましたが、コロナ禍で断念。そこで在外公館で働く「派遣員制度」を利用し、在メキシコ日本国大使館で2年間勤務しました。そこで目にしたのが、米国を目指してメキシコに滞留する移民と、人材不足に悩む日系企業の姿です。「仕事を求める人と企業を結びつけられないか」。その問題意識を卒業論文のテーマにしました。現在は外務省専門職員としてスペインの大学院で学んでいます。将来は、日本とラテンアメリカがともに経済成長できる関係づくりに携わりたいと思います。

外務省
2024年 国際社会学部 ラテンアメリカ地域専攻 卒業
土田 絢咲さん TSUCHIDA Ayasa



ラテンアメリカ進出を希望している日本企業の支援に携わっていきたいです!

メキシコの伝統的なソンブレロとポンチョ(sarape)



「死者の日」の定番メイクアップ

History 日本とラテンアメリカの歴史的交流年表

ピンクの文字は東京外国語大学関連の出来事

1609年●スペイン領の船が現・千葉県御宿に漂着。翌年、徳川家康が提供した船でヌエバ・エスパーニャ(現メキシコ)へ帰国。

1614年●慶長遣欧使節がメキシコへ到着。

1873年●日本・ペルー国交樹立。日本にとって初のラテンアメリカ諸国との外交関係が開かれる。

1888年●日墨修好通商条約を締結。日本にとってアジア以外の国との初の平等条約となる。

1895年●日本・ブラジルが国交を樹立。

1897年●日本人が組織的にメキシコへ移住を開始(チアパス州への「榎本殖民」など)。

●高等商業学校附属外国語学校(東京外国語大学の前身)に日本初の西班牙(スペイン)語科が開設される。日本人初のスペイン語教師が着任し、同年12月には初代外国人教師が派遣された。

1899年●ペルーへの集団移住が始まる。

●東京外国語学校として独立すると「西語学科」に改称。

●初期の教育を支えた篠田賢易(のちに主任教授)は、教材がない中で日本初のスペイン語読本『西語初歩』を編纂・出版。

1908年●ブラジルへの本格的な集団移住が開始。第一回移民船「笠戸丸」が781人の日本人移民を乗せてサントス港に到着し、東京外国語学校で学んだ「通訳五人男」(嶺昌、大野基尚、平野運平、加藤順之助、仁平寓)が現場で通訳を務める。当時はまだポルトガル語科が存在しなかったため、スペイン語科の出身者や中退者が通訳や移民会社の社員として活躍した。

1913年●東京外国語学校西語科卒業生の渡辺孝が青年らを引率し、「若狭丸」でブラジルへ渡航するなど、卒業生の南米進出が相次いだ。

1916年●東京外国語学校に葡萄牙(ポルトガル)語学科が新設される。

1919年●改編で「西語部」「葡語部」となり、「文科」「貿易科」「拓殖科」が置かれた。志願者の多くは貿易科・拓殖科に集中し、卒業生は商社、商船会社、外交官、移民会社など実業界へ幅広く進出した。

1920年代〜●ラテンアメリカ各地への日本人移住が進む。

1941年〜1945年●太平洋戦争により、日本と多くのラテンアメリカ諸国との外交関係が断絶し、現地の日系人社会も厳しい状況に置かれた。

1949年●新制の東京外国語大学が発足し、「イスパニヤ学科」「ポルトガル学科」としてスペイン語・ポルトガル語教育が継承される。

1950年代〜●戦後の日本人移住が再開(ブラジル、パラグアイ、ボリビア、アルゼンチンなど)。

1951年●12学科を7部に改編。第五部イベリヤ・南米圏(第一類イスパニヤ、第二類ポルトガル)に改称。

1955年●スペイン語の入試倍率が37倍を記録し、1957年の不況期でも就職内定率94%を誇るなど、学内でも屈指の人気学科となった。

1960年代〜●日本の高度経済成長に伴い、交流が移住中心から貿易・投資・資源開発・技術協力へと拡大。

1961年●「第五部イベリヤ・南米圏(第一類イスパニヤ、第二類ポルトガル)」が「スペイン科」「ポルトガル・ブラジル科」に改称。
※中南米地域との緊密な関係を背景に、学科名に「ブラジル」が冠された。(1995年まで)

1964年●「ラテン・アメリカ政経学会」設立。

●「スペイン科」が「スペイン語学科」に、「ポルトガル・ブラジル科」が「ポルトガル・ブラジル語学科」に改称。

1966年●大学院外国語学研究科修士課程(ロマンス系言語専攻スペイン語学・ポルトガル語学)が設置された。

1968年●メキシコ・シティでラテンアメリカ初の五輪開催。

1970年代〜●日ブラジル国家事業としてセラード農業開発を推進。日本の技術・資金協力によりブラジル内陸部が世界有数の穀物生産地へ発展。現場でも、卒業生たちが架け橋として活躍した。

1971年●メキシコ政府による交換留学制度が始まると、本学のスペイン語学科から毎年多数の学生が選ばれて渡航。留学交流の大きな足がかりとなる。

1977年●大学院地域研究研究科が設置され、中南米の地域研究が本格化した。

1980年●「日本ラテンアメリカ学会」設立など、本学の教員や研究者が日本のラテンアメリカ研究を牽引する。

1990年代以降●日系2世・3世とその家族の来日が増加し、日本各地に日系コミュニティが形成される。これに伴い、移民史や在日ブラジル人・日系人のアイデンティティに関する研究・教育の基盤も作られていった。

2005年●日・メキシコEPA(経済連携協定)が発効(2012年には日・ペルーEPAも発効)。

2016年●リオデジャネイロでの南米初の五輪に学部学生24名を言語ボランティアとして派遣。

2021年(2018年発効)●CPTPP(TPP11)などを通じ、ラテンアメリカ諸国との経済関係がさらに緊密化。

2023年●リオデジャネイロ州立大学とダブル・ディグリープログラム協定を締結。

学術交流協定校

(2026年10月1日現在)

＊学生交流協定
※GJO:Global Japan Office/Desk
※DDP:ダブル・ディグリープログラム

アルゼンチン	国立ラプラタ大学＊	
ブラジル	リオデジャネイロ州立大学＊ GJO/DDP	
	パラナー連邦大学＊	
	カンピナス州立大学＊	
	ブラジリア大学	
	バイーア連邦大学＊	
チリ	ロス・アンデス大学＊	
コロンビア	エアフィット大学＊	
メキシコ	メキシコ国立自治大学＊	
	グアナファト大学＊	

連載コラム［聴く］第14回

きく

神の声を聴く

アジア・アフリカ言語文化研究所［専門：地域研究］
後藤 絵美 准教授
GOTO Emi



イラスト＝伊津野 果地

2000年代半ばのエジプトでのこと。ムスリム（イスラーム教徒）の装いの変化を調査していた私は、社会の空気自体が変わりつつあるように感じていた。「敬虔であること」の価値が高まっていたのである。電話口で「アロー（もしもし）」ではなく、「アッサラーム・アライコム（あなた方の上に平安あれ）」と挨拶する人が増えた。カフェのテレビやタクシーのカーラジオで、音楽番組ではなく宗教番組が流れ始めた。街中で耳に入る音が変化し、それが社会の雰囲気を変えているように思われた。

ただし変化があったのは街に響く音だけではなかった。

当時のエジプトには若い層を中心に絶大な人気を誇った説教師たちがいた。その一人であるアムル・ハーリドは30代後半で、お洒落なスーツを着こなし、親しみやすい口調でイスラームの信仰の核心について語った。

ハーリドの説教の中に「心をこめて礼拝すること」（2006年）と題するものがあった。重要な信仰行為である礼拝は、通常一日五回行われる。その際信徒は、身体を曲げたり平伏したりしながら、神を称える言葉を唱える。この説教で彼が強調したのは、礼拝を習慣的に行うのではなく、心をこめて実践することの重要性だった。そして、そのための方法として「神の声を聴く」ことが提案された。

礼拝では必ずクルアーンの「開扉章」を朗誦する。ハーリドは、イスラームの伝承を引きながら、礼拝者が一節を唱えるたびに神はそれに応答すると説明した。「アッラーに讃えあれ、万世の主」と唱えると、神は「下僕よ、我を讃えよ」と応答する。「汝の嘉したまう人の道を歩ませよ」というときには、「我こそが汝を正しい道に歩ませる」と。続けて、ハーリドはこんな逸話を紹介した。かつて礼拝で「開扉章」を唱える際に、各節の後に間を置く信徒がいた。人々がその理由を尋ねると、彼はこう答えた。「神のお言葉を味わっているんだ。」

街に響く音だけでなく、人々が心の中で耳を傾けようとしていた「神の声」もまた、時代の空気をつくっていたのかもしれない。

Profile
東京外国語大学外国語学部南・西アジア課程ペルシア語専攻卒。東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究博士課程単位取得退学。現代イスラーム思想・ジェンダー。主著『神のためにまとうヴェール――現代エジプトの女性とイスラーム』（中央公論新社、2014年）。このコラムの内容について、詳しくは「神をめぐる体験――現代イスラーム運動と宗教的な意識、知識、身体感覚」巽孝之・宇沢美子編『〈21世紀版〉身体批評大全』（新曜社、2025年）をご参照ください。

連載コラム 五感でふれる 第2回

声のある教室

［マレーシア、インドネシア］

教員が問いかける。すると、教室中から一斉に大きな声が返ってくる。インドネシアの大学で初めて授業に参加した私は、その光景に驚いた。

2025年秋、マレー語・インドネシア語の調査で、本学の協定校であるマレーシア国民大学とインドネシア大学を訪れた。数日間にわたり複数の授業で調査し、そのすべてで調査後も教室に残って授業に参加させてもらった。インドネシアでは、簡単な質問なら学生達が皆で声をそろえて答えた。語学の授業ならまだしも、日本事情の講義でも同じだった。マレーシアでも、程度の差こそあれ、似た光景に遭遇した。

日本でこのような授業風景を目にするのは、小学校くらいまでだろう。それもあり、正直、インドネシアの学生がよく言えば純粋無垢、悪く言えば幼稚に思えてしまった。授業を黙って聴く日本の大学生像が頭にあり、彼らが小学生のマインドのまま大学生になったかのように見えたのだ。

だが、その後、このようにも考えた。マレーシアもインドネシアもイスラームが最大宗教だ。ムスリムの子供達は小学校入学前後からクルアーンの勉強を始める。そこで最も重要なのは、アラビア文字で書かれたクルアーンを正しく読誦できることだ。意味を理解する前に、とにかく声に出して唱えられるようにならなければならない。なので、クルアーンの授業には「自分の声を教師に聞いてもらう」ということが不可欠だ。このことが、非ムスリムも含めたマレーシア・インドネシア社会にとっての授業のあり方の底流にあり、大学の教室にもどこか息づいているのではないか。

授業とは、教師が一方的に「授ける」ものでも、学生が黙って「受ける」ものでもない。学生が働きかけることで教師との間に立ち上がるものなのだ。マレー語・インドネシア語で言えば、それぞれmengajar（教える）［能動態］diajar（教えられる）［受動態］belajar（教わる、学ぶ）［中動態］となる。さて、皆さんの授業は何態の授業だったろうか。



日本事情の講義での調査風景



旧多磨駅を彷彿とさせるインドネシア大学駅



多くの学生がバイクで通学している



人文科学部2号館入口

大学院総合国際学研究院［専門：言語学／言語資源開発］
野元 裕樹 准教授
NOMOTO Hiroki

Profile
東京大学文学部、東京外国語大学大学院地域文化研究科、ミネソタ大学大学院言語学プログラムで学ぶ。博士（言語学）。現在は、マレー語およびその関連言語の文法研究と言語資源開発に取り組む。主な著書に『10のレッスンでわかる 入門 マレー語』、『マレー語の教科書 詳解文法』、共編著に『言語研究に潜む英語のバイアス』、『Discourse Particles in Asian Languages』など。

歴史を刻む在学生

Influential Faces 1

外交への関心から都市交通の研究へ 留学経験がもたらした関心の変化



国際社会学部 中央アジア地域専攻 4年
小野 善公 さん ONO Yoshiyuki

Profile
2023年、東京外国語大学国際社会学部中央アジア地域専攻に入学。現在4年生。専攻を選んだきっかけはシルクロードに憧れたため。大学1年で国連ニューヨークスタディツアーに参加し、外務省や国際機関への憧れが生まれる。2024年春にウズベキスタン・カザフスタンに短期ステイし、2025年の夏から1年間、ウズベキスタンに派遣留学。

2024年の春にウズベキスタンを訪れた際、中央アジアの中心都市でもある首都タシケントに魅力を感じて、翌年から1年間の派遣留学を決心しました。その時は国連や外務省などの機関を目指していて、将来は中央アジアと日本を結ぶ橋になり、世界平和に自分の力で貢献したいという気持ちを強く持っていました。

転機となったのは、留学中の休暇にヨーロッパに旅行した時です。ベルリン、プラハ、ウィーンなど5カ国5都市を巡り、博物館や世界遺産も訪ねましたが、一番心に残ったのは各都市の公共交通機関や、国際列車、都市間バスなどでした。もともと幼い頃から鉄道や道路ネットワークには興味を持っていたので、日本の交通機関やウズベキスタンのそれなどと比べながらじっくり見入ってしまう自分がいました。

タシケントはラッシュ時の交通渋滞が激しく、地下鉄はぎゅう詰め。大気汚染も世界で指折りのひどさです。そんな経験から、都市交通の研究をして何らかの提言をしたり、インフラ輸出に携わったり、という形で日本と中央アジアの橋渡しができないかと考えるようになりました。外交の道の中でも、より現場に近い都市計画を動かす立場への関心が強まってきたのです。

この旅の後も、ウズベキスタンを中心に中央アジア各国へ鉄道やバスで旅し、パスポートのスタンプも一気に増えました。子どもの頃から、私の人生のキーワードは「移動」なんだなと、改めて感じた留学経験でした。



タシケント日本人墓地を訪れ、墓参会の下見



マルギランで出会い、チャイを振る舞ってくださった方々

Influential Faces 2

暮らしと直結する気候変動の問題を より広い視点から研究しています



大学院総合国際学研究科 博士後期課程 1年
アネット・バンダ さん Annet BANDA

Profile
ザンビア出身。ザンビア大学で開発学・社会学を専攻。2022年度秋学期～2023年度春学期の10か月間、交換留学で来日し東京外国語大学に在籍。ザンビア大学を卒業後2024年に再び来日、本学の大学院総合国際学研究科Peace and Conflict Studiesプログラム［略称PCS］で学ぶ。今秋博士前期課程を修了し、博士後期課程に進学した。

私がザンビア大学で勉強していたのは、社会学分野の中の開発学です。おもにザンビアの社会がどのような開発を経てきたか、あるいはどのように工業化を進めるかといった内容でしたが、より幅広く国際的な視点から学びたいと考え、東京外国語大学の大学院に入学しました。

大学院の博士前期課程では、おもに気候変動と紛争について学びました。私の母国ザンビアは工業化が進んでおらず、経済はかなりの部分を農業に頼っています。農業は天候に大きく左右されますが、それは生活そのものに直接影響するということです。たとえば雨が降らないと、水源が近い土地をみんなが求めるようになり、紛争につながりかねません。そこで、政府が水源・資源をどのように配分すれば、不平等が解消され、そこから発生しうる紛争を抑えられるのかを研究してきました。ただ、おそらくこの気候変動は長く続くでしょう。これからは、さらに長期的な視点を持って、いかに気候変動に適応していくかを中心に研究を続けていくつもりです。

日本で学んでよかったことは、より広い視野を持てるようになったことです。日本の方はもちろん、多様なバックグラウンドを持つ人たちと出会えました。自国だけにいては、おそらくこれだけ多くの出会いはなかったし、情報も得られなかったでしょう。ザンビアには、昔の私と同じように交換留学を目指す人もいます。自分の経験をできるだけ多くの人にシェアしていきたいと思っています。



ザンビア南部におけるフォーカスグループディスカッションで、データ収集を行うアネットさん